

がんで苦しむ患者さんや  
 そのご家族に  
 一刻でも早く優れた製品  
 を届けるために  
 全社一丸となって  
 取り組みます。

代表取締役社長 兼 COO

真鍋 淳

2025年ビジョン、がんに強みを持つ  
 会社に向けて

私どもは、「がんに強みを持つ先進的グローバル創薬企業」となることを「2025年ビジョン」として掲げ、2016年度から2020年度の「第4期中期経営計画」を2025年ビジョンに向けた「転換」を実現するための5か年計画として、2016年3月に発表しました。

循環・代謝領域に強い会社から、がんに強みを持つ会社へ、文字通り「転換」することを宣言した当初は、ステークホルダーの方々から場合によっては疑問の声を聞くこともありました。

2016年度、2017年度と2年が経過した今では、従業員一同2025年ビジョンに向けてがん領域の研究開発が確実に進んでいると実感するに至っております。また、社

外の医療関係者や株主・投資家の皆さまからの期待も高まっていると感じております。今回は、私どもがなぜがん領域にチャレンジしようと考えたのか、そしてこの2年間でどれだけ進歩してきたのか、お話をさせていただきたいと思っております。



がんは罹病率・死亡率が最も高い疾病の一つ

がんは国内においてもグローバルに見ても罹病率が最も高い疾病のひとつであり、毎年世界で1,400万人もの人が発症するとも言われています。また、がんは2番目の死亡原因となっており、2015年には世界の死亡者数の6分の1、820万人の患者さんががんで亡くなったと言われております。先進国においてはがんが死亡原因となる割合はさらに高く、日本では2人に1人が一生の内1度はがんになり、3人に1人ががんで亡くなると報告されています。

新規がん患者数(全がん種) 2012年 (千人/年)

世界	日本	米国	欧州
14,068	704	1,604	3,715

がん死亡患者数(全がん種) 2012年 (千人/年)

世界	日本	米国	欧州
8,202	379	617	1,933

出典：GLOBOCAN 2012, "estimated cancer incidence mortality and prevalence worldwide in 2012"

がん治療の変革と未だ残るアンメット  
 メディカルニーズ

世界の医薬品市場を疾患領域別にみると、がん領域の市場規模が大きく、市場は1,000億ドルを超えるほどになっています。従来は効果と副作用の分離が難しい化学療法剤が中心でしたが、抗体医薬などの分子標的薬が登場し、がん種の中のサブタイプ毎に高い治療効果を発揮するようになってきました。最近ではがん免疫療法やがんの細胞治療など画期的な治療法・薬剤が生み出され、がん種によっては目覚ましい治療効果、延命効果を示すようになってきました。しかしながら、有効な抗がん剤がないがん種やサブタイプの存在、抗がん剤に耐性を獲得していく問題など、我々製薬メーカーが解決していかなければならない問題は多く残されております。

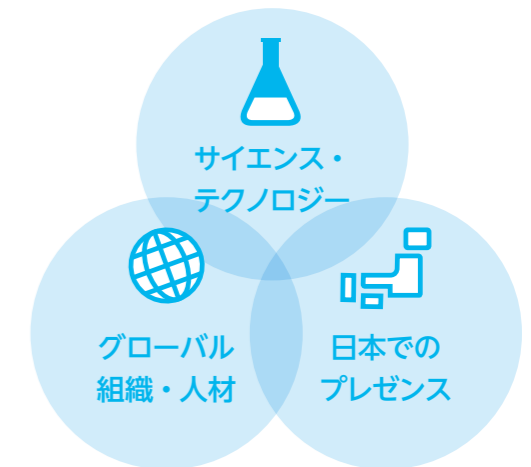
日本発の創薬型企業としての強み

第一三共は百年の歴史を有する三共と第一製薬が統合してできた会社であり、両社とも創業時から日本発の創薬企業を目指し、世界的にブロックバスターとなったプラバスタチン、レボフロキサシン、オルメサルタンなどを生み出してきました。がん領域においても数は少ないですが、クリスチンやイリノテカンなどを世に送り出してきました。

私は研究者として長年日本の研究所でキャリアを積んできましたが、米国留学や米国での研究開発に携わった経験により、当時から第一三共のサイエンス・テクノロジーのレベルはワールドクラスのハイレベルのものであると感じていました。細部にこだわる職人気質を持ち、チームプレーを重視する日本の研究者・研究開発チームだからこそグローバルで競争の激しいがん領域においてもSOC\*を変革するような画期的な新薬を生み出せると判断し、がん事業を立上げ・確立することを戦略目標に掲げました。

\* Standard of Careの略。現在の医学では最善とされ、広く用いられている治療法

第一三共の強み



がんの研究開発の転換

2025年ビジョン、第4期中期経営計画を発表した直後、2016年4月にがんの研究とがんの開発を1つの組織のもとに統合し、オンコロジーR&Dのグローバルヘッドとしてアントワン・イベルを採用し、以降大小さまざまな打ち手を打ってきました。